

---

# 変化しそぎな少女達～噂の田中さん

空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変化しすぎな少女達～噂の田中さん

### 【Zコード】

Z0871M

### 【作者名】

空

### 【あらすじ】

小学校から高校まで、9年間と言う一途な恋心を田中小夜に抱いていた稻垣蓮は、高校1年生の夏、感動の再開を果たす はずだったが、いきなり彼女に思い切りビンタされ。お人よしで女の子らしかった彼女は一体どこへ……。何故か高校に入つてモテ始めた蓮の一途なラブストーリー。主人公、田中さん以外の男女に腹黒すぎ……。

## 再開セシル・発(繪畫)

下手な小説ですか？」「よくしゃべりや。」（トログラギー）

## 再開はビンタ一発

九年前。

まだ僕が母親に頼つっていた頃。小学校の入学式に時、僕は君に「田で恋をしてしまった。その頃はまだ、小学校1年生で6歳と言つ年齢だけあって、まだ本当の好きではなかつた。でも、段々成長するにつれて、好きがどう言う意味なのかを分かり始めた時、僕の君に對しての気持ちがはつきり「好き」と確信した。

そして、中学生になるまで、自分の気持ちを隠そつと決めた。しかし君は僕と同じ中学校には行けずに離れてしました。3年間と言つ年月が経ち、僕等はやつと再会を果たす事ができた。

-パチン-

はずなんだけど……。

僕こと稻垣蓮は九年間思い続けていた女の子、田中小夜さんにビンタを一発食らつていい。理由はこうだ。高校の入学式に初対面の女の子に告白され、即答で断つたらその女の子の友達が、田中さんだつたらしく、話を聞いた田中さんが怒つて僕にビンタしたと言つだ。

何分か沈黙が続いた。告白して来た女の子はオドオドしているのに

関らず、3年ぶりに再会した田中さんは僕を睨んでいる。田中君は、多分睨んでいるから細く見えるが、多分変わっていないだろう。顔も幼馴染ーズよりも、小学校の幼さが残つており子供っぽい。

「稻垣君、もつとましな断り方つて言つたの？」

やつぱり田は小学校の頃と変わつていなかつた。

「うーん……フォローしながら断ると、余計に傷つくと思つて」

「ほ、本当にもう大丈夫だから……ね？」

聞きたくないと言つ様に、僕の声を遮る様に隠れていた女の子が言つた。あー言つ子に良く告白されるけど、一番苦手なタイプだ。友達に断られたと言つて友達に文句を言わせる子。最終的にはいい子ぶつて止めさせる。そう言つ子は一番嫌いだ。しかも言つた相手が田中さんだつたら尚更……。

「ほり、彼女もそう言つてるし授業も始まっちゃうよ？」  
「…………」

唸る彼女は小学生の頃と同じだつた。違つてゐるのは口調と性格の半分だと思う。多分彼女は口より先に手が出る。扱つのには大変そうだ。でも、小学生の頃の彼女はお人よしで、少しどじだつたけど隙が無かつた。僕からするに彼女は小学生とは違うどこか抜けてる

感が出てる。背も小ちいし……。

「なあに一人で考え込んでるのよ」

「美代……どうしてこんな所に？」

「先輩が呼んでるから、探してたのよ」

美代。府川美代。彼女とは、幼稚園の頃から高校までずっと一緒に  
幼馴染だ。彼女も中々の美少女だが、田中さんには敵わない。あくまで僕視点だけど。

「先輩? どうして」

「どうしてって……あ、ちなみに男よ」

「女かと思った」

「口うりと笑う僕に、自惚れるんじゃないわよと捨て台詞を言って、  
教室に戻つていった。それを眺めながら、先ほど田中さんに叩かれ  
た頬に手を当てた。痛さはあるでない。でも、心の傷は痛む……何  
てくさい事を思つてはいる自分がおかしかつた。

「……はあ」

五時間目の授業は自習つて言つてたし、サボるつか。高校生活3日目は散々と言つよりも疲れた。田中さんに会えてうれしかつたけど、

あんな再開だったのが傷だけ。

「それにしてどこから抜けよつか」

「あつちの方に裏口があるから……」

先程聞いた様な声がした。田中さんかなと期待していた俺は一瞬にして恥がしくなった。横に居たのはさっき田中さんの後ろに隠れて止めていた女子。名前忘れたけど……。

「ありがとう、えつと」

「あ、山田衣緒<sup>いおり</sup>って言<sup>い</sup>てます」

「そう、名前覚えるの自信ないけどよろしく」

一言言つて、僕はその裏口に向かつた。……おかしい。何も無いではないか。裏口どころかドアすら見当たらぬ。学校案内でも裏口なんて言つのはなかつた。……とするとあの山……何とかさんが嘘を吐いたって訳か。

「よひ……」

教室に戻ろうとした僕を引き止めたのは、いかにも不良ですをアピールしている様な格好の長身の女性。黒髪で、マスクをしている。しかも学ラン……。ここは学ランじゃないぞ。女子はブレザーだ。男子も学ランではない。

「…………えと？」

「お前、あたしの妹を思い切り振ったみたいだな」

「妹？もしかして山なんとかさん？」

あー…………そう言つ事が。何となく状況が読めた。要するにこれは復習だな。こんな事、今まで数回しかなかつたから、慣れてる慣れてないと言われば慣れてない。むしろ苦手な状況だ。

「いい度胸してるじゃねーか……」

「はは、お褒めに預かり光栄です」

苦笑いしている自分が馬鹿らしい。

「ムカつく野郎だ……」

突然、女不良が僕に向かつて走つて來た。さすがに至近距離じゃ避けられない。目を瞑つた瞬間、女神の声がした。

『手を、手を早く…』

一瞬の出来事だった。僕は屋根の上にいた。

田の前に居たのは、息を切らして僕の手を掴んでいる

田中さんだった。

「び……どうして」

「う、これは……お詫びよつ

顔を真赤にして、僕を見つめていた田中さんは文句あるへつと黙つてそっぽを向いてしまつた。

「……さつきは叩いてごめんなさい」

「いいよ、痛くなかったし」

突然誤つてきただのでびっくりした。痛くなかったと言つ事は本当だつた。

「それより、どうして田中さんがこんな所に？」

「うーん……何でだるーい」

人差し指を唇におき、首をかしげた彼女をに、思い切り抱きついた  
いと思つた。

「……変わつてないね、蓮ちゃん」

「……田中さんは変わつたね」

「え、そつかな……」

「うん、強くなつた」

再開して、初めて名前で呼んでくれた。

「小夜でいいよ？ 私も下の名前で呼ばせてもらつてるし」

「……じゃあ、小夜」

「ふふ、四口シクね」

キリの笑顔は変わっていなかつたよ。

それから僕等は学校抜け出し、近くのファミレスに寄り、家に帰つた。

「あれ、小夜つて同じマンションだったの？」

「そうよ、みづから悪い？」

性格が戻つてしまつたのか、機嫌の悪い小夜だ。無意識の一重人格か?と思わせるように、小夜の性格は口々口々変わる。ファミレスでご飯を食べた時は機嫌がよかつたけど、帰り道は黙り込んで機嫌が悪そうな顔をしていた。

「驚いた、番号は?」

「そんな事聞いてどうするの?」

「いや、遊びに行つちやおうかなつて

「馬鹿な事言わないので、それに小学校の頃の私達じゃないんだし」

もつと書いて、僕等はエレベーターに乗つた。小夜も僕と同じ階だつたらしく、何でついてくんのよと、少々機嫌悪そうに言われ、

僕はちよつとショックだった。

「……え

「隣?

「う、嘘ー

運命のいたずらか、神様がくれた贈り物かなんて、正直どっちだつていい。うれしかった。

「……おやすみなさいっ

「うん、おやすみ」

今日は色々な事が会つた。9年間思い続けた人に会えたと思つたらビンタを一発。不良に絡まれたり、襲われそうになつた所を小夜に助けられたり。

体力が限界になつた僕が、制服のまま眠つていたと知つたのは次の日のお昼頃だった。

\* \* \*

「……蓮ちゃん」

無意識に彼の名前が出てしまった。

「小夜ー、」飯よ

「あ、今日はいらない

「あら、どうして?」

「お、お友達と食べてきたの」

小夜、田中小夜。それが私の名前。顔は普通で、家柄も普通。普通の女の子だ。お友達。その人の名前は稻垣蓮だ。小学校が同じで、私の初めての友達。

「めずらしいわね、あなたが友達と食べるなんて……小学校以来だわね」

「そ、そんな事ないよ

「それにあんた、今日はいつもと違ひ雰囲気よ」

「いつもと同じだよー。」

普通の家族だけど、私には父親が居なかつた。私が中学校一年生になつた次の日に、トラブルを起こして警察に捕まつた。そのためか私は転校するはめになつた。今は双子の兄二人と、母親で5人でそこそこ大きなマンションで平凡に暮らしている。

「……隣に越してきた男の子、かつこ良かつたわよー」

「隣？」

隣……連ちゃんの事かな。確かに蓮ちゃんてカッコイイけど、へたれだしなー。

「あら、小夜知らないの？」

「え……」

「小学校で同級生だった蓮君、覚えてる？」

「へ、うん」

「その子と同じ名前の子なのよ、結構似てるし」

だつて、本人だもん……。でも、顔は大人っぽくなつて変わつてい

たのは間違つていない。でも本当に、変わったんだなって思つたところは、少し、紳士になつた氣がする。

「あの子、蓮ちゃんだよ?」

「あら、そんな事知つてるわよ

「な、じゃあ何でそんな事!」

「小夜が蓮君の事を覚えているかどうか確かめただけよ

母はベーコンと私に舌を出した。皿邊じやないけど、お母さんは周りにいる他のお母さんより若く見える。でも、若く見えるせいか、怒られても全然恐くない。むしろ可愛いく思えてしまつ。そんな母を持つた私の双子兄の弟の方である愁は極度のマザコンである。

「ただいまー」

「あら、お兄ちゃんズが帰つてきたわ」

双子の兄の方はカツ「いい。名前は翔。少々モデルの仕事をやっていて、私が愛読する「ガイア」と言つ雑誌の読者モデルをやつている。まあ自慢の兄だ。

「小夜、学校は大丈夫か?」

「うん」

「やつか、それは良かったよ」

翔はいつも私の事を気にかけてくれる。

「あのね、小学校の頃、お友達だった子に会ったの」

「もしかして蓮?」

「あ、当たりーーー!」

「やうだと思った

再開はヒンタ一発（後書き）

まだまだ増やすもん！

トロ、ブリザー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0871m/>

---

変化しそうな少女達～噂の田中さん

2010年12月30日07時15分発行